

梅の開花情報や春一番の便りが届き、いよいよ本格的な春の訪れです。
現在会員登録数 4,238 人さま。次号は 3 月 21 日発行の予定です /

+-----◇◆◇ 目次 ◇◆◇ -----+

【1】お知らせ

【2】コラム

《1》この本読んだ？

《2》イーハトヴ周遊 宮沢賢治の童話を読破する

《3》子どもの本の珠玉のことば

《4》行って来ました！

《5》宮川健郎 私の出会った児童文学者たち

【3】全国のイベント紹介

【4】プレゼント

+-----+

■-----■
【1】お知らせ

● 子ども向け検索サイト「本の海大冒険」をリニューアル公開

子どもが楽しみながら本を探ることができる検索サイト「本の海大冒険」を
リニューアルし、公開しました。「YouTube 版 本の海大冒険」ともリンクし、
「作家さんのとびら」や「キャラクターのとびら」もバージョンアップしてい
ます。子どもの本に関わる大人の方にもおすすめです。ぜひご利用ください。

◆ウェブサイト「本の海大冒険」 <https://kids.iiclo.jp/>

※詳細は→ http://www.iiclo.or.jp/08_reading/index.html

● 「日産 童話と絵本のグランプリ」40周年記念フォーラム

「童話を語る・絵本を描く - 童話・絵本のつくり手を目指すみなさんへ」
第 40 回「日産 童話と絵本のグランプリ」表彰式を一般公開します。表彰式
の中で、本グランプリ審査員による、40周年記念フォーラムを開催します。

日 時：3 月 9 日（土） 13：30～15：30

会 場：大阪府立中央図書館 ライティホール

講 師：黒井健（絵本画家）、高畠純（絵本作家）、
富安陽子（童話作家）、吉橋通夫（児童文学作家）

進 行：宮川健郎（IICLO 理事長、児童文学研究者）

定 員：70 人（申込先着順） 対 象：中学生以上 参加費：無 料

主 催：大阪国際児童文学振興財団

協 賛：日産自動車株式会社

お申込み、詳細は ↓↓

http://www.iiclo.or.jp/07_com-con/02_nissan/index.html#40forum

● 寄付金を募集しています

当財団の運営を応援いただける個人、法人の皆さまからのご寄付を募っています。寄付金は、当財団が行う講座・講演会など、さまざまな事業経費に充てさせていただきます。ぜひ、ご協力いただきますようお願いいたします。

※詳細は → http://www.iiclo.or.jp/donation_10th.html

※Syncable（シンカブル）＝継続寄付（毎年／毎月）、単発寄付が選べます。

→ <https://syncable.biz/associate/19800701/>

● YouTube「大阪国際児童文学振興財団 公式チャンネル IICLO」

<https://www.youtube.com/@iiclo1196>

公開内容一覧は → http://www.iiclo.or.jp/ml_youtube/index.html

● 当財団公式X（Twitter） → https://twitter.com/IICLO_News

■ ----- ■
【2】コラム
■ ----- ■

《1》この本読んだ？ Yasuko's & Hana's Talk

『姫とホモソーシャル：半信半疑のフェミニズム映画批評』 鷲谷花/著
青土社 2022年11月 対象年齢：大人

* 今回のゲストは映画研究者で当財団特別専門員の鷲谷花（H）さんです。

概要：従来論じられてきたフェミニズム批評や女性論を一度疑ってみるところから、映画を分析し、評論した映画論集。『マッドマックス 怒りのデス・ロード』、「バーフバリ」シリーズで、家父長制を問い、黒澤明の『羅生門』、『隠し砦の三悪人』で女性像を考察し、内田吐夢の作品で高倉健と淡島千景の描かれ方を内田の戦争体験と重ねて読み解き、クエンティン・タランティーノを含むホラー映画の中の女性の描かれ方を検証し、アニメーション映画『太陽の王子 ホルスの大冒険』と戦後日本人形劇史とのかかわり、『風の谷のナウシカ』と『ハウルの動く城』におけるナウシカ像、ハウル像を分析している。本書により2023年12月にサントリー学芸賞を受賞。

Y：昨年12月になりますが、サントリー学芸賞受賞おめでとうございます。

https://www.suntory.co.jp/sfnd/prize_ssah/detail/202304.html

今回はそれを記念して、『姫とホモソーシャル』について著者の鷲谷さんにお話をうかがいたいと思います。

この本を書かれた動機をお教えてください。

H：青土社の『ユリイカ』及び『現代思想』の依頼を受けて書いた映画論の原稿がかなり溜まっていたことから、青土社の編集者の方から単著出版のお話をいただきました。ちょうど新型コロナウイルス感染症の流行による自宅待機を余儀なくされ、新規にリサーチして研究を進めることが難しかったこともあり、この機会に過去の原稿をまとめるべきかと思い、関心領域

のひとつであるフェミニズム映画批評に関連する内容の原稿を 10 本選び、2 本 1 組の 5 部構成になるように加筆して解題をつけ、書籍化しました。

Y：分析が鮮やかで、文章に勢いがあり、とても興味深く読ませていただきました。児童文化にかかわる章は、第 5 部「アニメキャラ破格の魅力」です。

H：第 9 章「美しい悪魔の妹たち——『太陽の王子 ホルスの大冒険』にみる戦後日本人形劇史とアニメーション史の交錯」は、元は『ユリイカ』の高畑勲特集号に依頼を受けて執筆した原稿です。執筆時には大阪府立中央図書館国際児童文学館所蔵の人形劇団・人形座の資料も閲覧させていただき、お世話になりました。元人形座の石井マリ子さんにも聞き取り調査にご協力いただいたのですが、書籍化された際にも喜んでいただき、こちらとしても大変嬉しかったです。第 10 章「孤高のナウシカ、ポンコツのハウル」は、元は講談社の『現代ビジネス』web 版の依頼で書いた原稿 2 本をまとめたもので、本来「描かれた絵」であるはずのアニメのキャラが、実在する人間以上に、気になる、魅力的な存在として生きていると感じられるというのはどういうことか、自分なりに考察してみました。

Y：二つの異なる観点からのアプローチでしたが、第 9 章は周辺領域を見渡しながら歴史をたどることの重要性を、第 10 章は、鷺谷さんの幅広い映画の知識からの人物像の分析のおもしろさを感じました。

鷺谷さんは映画を研究されていますが、児童文学、児童文化との接点はどんなところですか。

H：映画それ自体が、19 世紀末に商用化された時点から、「児童文化」の重要な一領域だったと考えています。最初から子どもたちは映画に強く惹きつけられ、一方、教育や宗教の関係者、警察や中央官庁の役人は、映画の悪影響を警戒して子どもに映画を見せまいとし、あるいは「ためになる」映画を子どもに見せて教育しようと努めてきました。国家や産業内の映画規制・検閲システムは、多分に子どもの観客を意識して作られ、それが各国の映画のありかたに大きな影響を及ぼしてきました。昔からそういった歴史に関心をもって研究を進めてきました。また、映画はたいていは集団作業で製作されるものですので、そこに児童文学、児童文化に関わる人材が参加する機会も多く、児童文学・文化の仕事をする人が映画の仕事もする、あるいは映画の仕事をする人が児童文学・文化の仕事をする、といった流動性・融通性にも興味があります。

Y：これからどんな研究を考えていらっしゃいますか。児童文学、児童文化との接点としてはどうですか。

H：ここ 10 年間ほど、昭和期の幻灯（スライド）文化に関する調査研究を進めています。幻灯には写真を映写するタイプと描かれた画を映写するタイプがあり、後者の画は「幻灯画」と呼ばれたのですが、第二次世界大戦期の日本で幻灯の国策教育・宣伝方面への活用が促進された際に、後にマンガ、アニメ、絵本や紙芝居など児童出版美術の分野で活躍することになる描き手が、多数「幻灯画」を手がけたことがわかってきています。それぞれの産業の規模が小さく不安定だった時期に、「物語性のある絵」の描き手は、映像と出版の境界を越えて、複数の領域で仕事をし、そうやって各分野が発展してきたことが、「幻灯画」に注目することでクリアに見えてきます。

Y：ますますのご活躍を期待しております。

《2》イーハトヴ周遊 宮沢賢治の童話を読破する

第102回「学者アラムハラドの見た着物」

眼の中をおとずれたもの

途中から原稿が欠落してしまった作品です。

「学者のアラムハラドはある年十一人の子を教えて居りました。／みんな立派なうちの子どもらばかりでした。」という書き出しのまえがきがあって、その塾が「街のはずれの楊の林の中に」あることもわかります。つづいて、(一)と(二)の章がありますが、(二)のあとのほうの原稿がないのです。

(一)の塾の場面で、アラムハラドは、火や水や小鳥の例をあげて、それぞれの本来のありかたを語ります。その上で、「人が何としてもそうしないではないことは一体どういう事だろう。」と問いかけます。みんな一生懸命に考えて、まず、大臣の子のタルラが「人は歩いたり物を言ったりいたします。」と答えます。アラムハラドに「けれども人にはそれよりももっと大切なものがないだろうか。」とうながされて、タルラは、さらに「飢饉がやむなら足を切っても口惜しくありません。」といます。そして、ブランドという子が「人が歩くことよりも言うことよりもっとしないではいけないのはいいことです。」と答え、セララバアドは、「人はほんとうのいいことが何だかを考えないでいられないと思います。」と答えます。

(二)では、アラムハラドと子どもたちは、静かに林の中へ入っていきます。アラムハラドは、名高いヴェーッサンタラ大王の徳の話をして、やがて、林の木の間がぱちぱち鳴って、雨が降りはじめます。

(一)については、「賢治作品における自己犠牲主題を考察するうえにひとつの手がかりを与えるもの」(天沢退二郎『新修宮沢賢治全集 10』解説、1979年)という意見もありますが、作品のタイトルのことを考えると、それ以上に気になるのは、アラムハラドが二度ほど眼をつぶったときに見た景色です。(一)のおしまい近くから。

〈アラムハラドは(中略)自分の室に帰る途中ふと又眼をつぶりました。さっきの美しい青い景色が又はっきりと見えました。そしてその中にはねのような軽い黄金いろの着物を着た人が四人まっすぐに立っているのを見ました。〉

まえがきのしめくりに「このおはなしは結局学者のアラムハラドがある日自分の塾でまたある日山の雨の中でちらっと感じた不思議な着物についてであります。」とありますが、雨の中のことは読むことができません。書かれなかったのか、原稿がうしなわれたのか。アラムハラドに、いったい何がおとずれたのでしょうか。読むことができない、この先に、物語の完結が用意されていたような気がしてなりません。(馬車別当)

(本文の引用は、『宮沢賢治コレクション4 雁の童子』によりました。)

《3》子どもの本の珠玉のことば 56

「ちがうよ ちがうよ まるでちがうよ。ぼくの ほしいのは さいている
はなでなくて かおにある はなだよ」
「ごめん ごめん。これは おおまちがいの とんちんかん」
おおきな だるまどんは あたまを かきました。

(『だるまちゃんとてんぐちゃん』 加古里子/さく・え こどものとも傑作
集 福音館書店 1967年11月 p.21)

子どものころ、何度も何度も読んでもらい、また自分でも読んだ本です。だる
まちゃんがてんぐちゃんの持っているよううちわ、ぼうし、げた、鼻が欲しい
と、うちにいる「おおきな だるまどん」に訴え、だるまどんが工夫をして、
だるまちゃんに望みのものを用意します。

子どもの私が好きだったのは、まずは、てんぐちゃんのおおらかさです。だる
まちゃんが、てんぐちゃんの持ち物の真似をしてやってくると、てんぐちゃん
は「ずいぶん いいもの みつけたね」と必ずほめてくれます。妹を持つ私
はいつも妹が真似をするのを嫌がっていたので自分の狭量に気づきました。
結末では、だるまちゃんはすずめを、てんぐちゃんとはんぼをつかまえます。
てんぐちゃんはだるまちゃんをうらやましがらず、とんぼを持ってうれしそ
うにして、だるまちゃんの鼻を「いちばん いい はな」だとほめるところに
は、「すごいなあ。自分にはできないなあ」と思いました。

また、だるまどんが、だるまちゃんを戒めることなく、だるまちゃんの望みを
かなえるために、必死になるところも心に残りました。「鼻」を「花」と間違
えたときも、だるまちゃんを責めるのではなく、謝り、「おおまちがいの と
んちんかん」とユーモラスに答えてくれます。自分の親とは違うおおらかさ
をうらやましく思うとともに、「とんちんかん」という音に何度も笑いました。
そして、だるまちゃんの鼻をおもちをついて作る時には、家族総出でだる
まちゃんを応援します。家族のあたたかさが身に沁みました。

もちろん、うちわ、ぼうし、げた、花がたくさん並んでいる絵や、だるまど
んの工夫によって、身の回りのものが、てんぐちゃんの持ち物と似たものにな
ることの喜びも感じましたが、子どもの頃の私はそれより、親子関係、友だち
関係に心が向いていました。

今回の「この本読んだ？」に登場して下さった鷲谷花さんは、映画、スライ
ドの研究をされていますが、その中には、かこさとしのスライドも含まれて
います。かこさとしは川崎などでセツルメント子供会活動に参加し、スライ

ドや紙芝居を演じていました。これらは子どもたちの直接的な反応を元に創作されており、彼の絵本づくりもそこに原点があるように思われます。そういう意味で、『だるまちゃんとてんぐちゃん』も子どもの日常や思いとぴったり重なる作品なのだと改めて思いました。(Y)

《4》 行って来ました！

絵本作家の近藤薫美子さんが、京都府亀岡市に 2024 年 1 月 27 日にオープンしたばかりの「近藤薫美子・小さなえほん館—絵本原画ギャラリー」に行ってきました。近藤さんの絵本原画が順次展示されるスペースです。4 月 22 日まで開催されている「「はじめまして」「たねいっぱいわらったね」「どん・ぐりぞうのおはなし」の絵本原画展示」を見ました。

ギャラリーの中に入ると、白い壁と木の床が原画を引き立たせています。靴を脱いであがるようになっていて、落ち着いた雰囲気を楽しめます。1 階には、クヌギシギゾウムシのどん・ぐりぞうが、「なんでもや」を始めていろいろな災難に遭遇する『どん・ぐりぞうのおはなし』(アリス館 2007 年 12 月)の原画が展示されていました。

2 階には桜の花が咲き始めるところから次の春が来るまでの様子を鳥や虫が「はじめまして」と見に来る様子を描いた『はじめまして』(偕成社 2014 年 12 月)、いろいろな草花の種がはじけたり、飛ばされたり、くっついたりする様子とそれに反応する虫や鳥や動物たちと描いた『たねいっぱいわらったね』(アリス館 1999 年 12 月)の原画が展示されていました。

絵本もいっしょに展示されていて、印刷の様子や文字が入ったときにどう変化するか、どんな物語かなどを確かめながら見学しました。また、画材には、色鉛筆やパステル、水彩絵の具、ペンなどが使われていて、原画ならではの微妙な色の感じが美しく感じられます。『はじめまして』では、桜の枝のアップの絵がリアルで、お花見に行ったときのことを思い出しました。また、雪の中で葉を落として立つ桜の木々の風景は奥行が感じられ、自分もその中にいるような気持ちになりました。

『はじめまして』と『たねいっぱいわらったね』は写実的とも言える植物の様子にやや擬人化された生き物が描かれ、それらが「びっくりしたね」「すごいだね」など、たくさんのことをつぶやいています。自然の楽しさと、生命の循環を感じさせる 3 作で、近藤薫美子ワールドを楽しみました。(K)

近藤薫美子・小さなえほん館 Instagram

<https://www.instagram.com/kon.petit.musee/>

《5》 宮川健郎 私の出会った児童文学者たち 第 8 回

第3章 あまんきみこさん

その2 現代の童話作家

あまんきみこさん（1931年～）と母宮川ひろ（1923～2018年）は、同人誌『どうわ教室』（1966年4月創刊）でいっしょに勉強した仲間です。あまんさんは、母より8歳年下ですが、母が亡くなるまで、50年あまりも、ずっと友だちでいてくださいました。私も、小学生のころから現在まで、折々お目にかかることがあります。

この連載では、「思い出話」を語るだけではなく、私の出会った児童文学作家や評論家の仕事に対する考察や、さらには、そこから、現代児童文学史のとらえ直しも試みます。ご愛読ください。

前回の配信時に下記の誤りがありました。おわびして訂正いたします。

データは、すでに修正してあります。

・6ページ（注）1、5行め

「私達は、『びわの実学校』に投稿しているのよねえ。」（誤）

→「私達は、『びわの実学校』に登校しているのよねえ。」（正）

<本編はこちらから>

http://www.iiclo.or.jp/ml_magazine/watashinodeatta.html

【3】全国のイベント紹介

●「出久根育展 チェコからの風 静寂のあと、光のあさ」

会期：開催中～3月3日（日）

場所：武蔵野市立吉祥寺美術館

時間：10：00～19：30 休館：2月21日、28日 入館料：有料

主催：武蔵野市立吉祥寺美術館（（公財）武蔵野文化生涯学習事業団）

上記イベントの詳細およびその他の講座・講演会、展示会、公募情報については、こちらからご覧ください。↓↓

http://www.iiclo.or.jp/03_event/04_other/index.html

※イベント情報をお送りください。当財団HPに掲載させていただきます／

【4】プレゼント

今号のコラム《1》「この本読んだ？」で紹介しました『姫とホモソーシャル』をプレゼントします。ご希望の方は、プレゼント応募フォームから、(1)お名前 (2)郵便番号・住所 (3)電話番号 (4)メールアドレス、よろしければ (5)このメルマガのご感想をお書きのうえ ご応募ください。

応募フォーム⇒ <https://forms.gle/lGzdaWoDzE4pc7ku8>

締切は3月11日（月）、当選発表は発送をもって代えさせていただきます／

編 | 集 | 長 | の | つ | ぶ | や | き |
—」 —」 —」 —」 —」 —」 —」 —」 —」

今回の「行ってきました」の取材は財団スタッフ3人で行きました。周りは山に囲まれ、田畑が広がり、小川が流れています。近くには湯の花温泉があり、以前訪れ、いいお湯だったことを思い出しました。今度来たときは、のんびり温泉につかって山里の情緒にひたりたいと思いながら帰りました。

(T A)

みなさまのご意見・ご感想をお聞かせください。下記メールアドレスまでお願いします。

原則として返信はいたしませんのでご了承ください。

●このメールマガジンは、ご登録いただきました皆様に配信しています。

●配信の登録・解除・変更は、

http://www.iiclo.or.jp/ml_magazine/index.html

●このメールの送信アドレスは配信専用です。

●記事の無断転載はご遠慮ください。

発行：一般財団法人 大阪国際児童文学振興財団 <http://www.iiclo.or.jp/>

〒577-0011 大阪府東大阪市荒本北 1-2-1 大阪府立中央図書館内

TEL：06-6744-0581 FAX：06-6744-0582 E-mail：office@iiclo.or.jp

